

## 第五章 「失われた二〇年」

### 「二〇年に何が失われたのか」

#### 高齢者対策は進展、高齢社会対策が延滞

本誌のつくりつけとしては、ここから始めることもできたのですが。

しかし時間の切迫するのを感じるとき、じっくり現状の分析をするのはむずかしい。いま急ぎなすべきことを優先して、その中でも歩みながら語るのがいいと判断して、このテーマは「終章」に近いここに置くことにしました。

目次をみて、そんな筆者側の心中を推量して、まず「終章」に近いここから読みはじめてくれた優れた読み手のみなさんには感謝しつつ、それでも急ぎ足で「失われた二〇年」を顧みようと思います。

今から「二〇年」前を文字通りに遡れば一九九七年です。その二年前の一九九五年には阪神淡路大震災とサリン事件という「天災人禍」に襲われた年がありました。阪神淡路大震災はそののち毎年、慰霊の催しをつづけていますから、そこからおよその時間距離がわかります。あの年から起算してここまで「失われた」となれば相当の時の量が想定されるでしょう。

失われてしまった「今日」というのはどういうことになっているのでしょうか。

ご存じのように、ひと足先に二〇一〇年に「失われた二〇年」がいわれました。それは一九

九一年に始まったバブル崩壊後の日本経済の低迷がなおつづいており、いまやアベノミクス効果も薄らいで「失われた三〇年」も語りはじめられています。

成長のない「ゼロ成長」。先進諸国がともに長く陥っている「ゼロ成長」の状態からの脱出を、経済における「失われた二〇年」はテーマにしています。そのなかでも日本が際立っており、その要因を西欧諸国と比較しながら一〇年、二〇年と仔細に論じてきていますが、脱出口がみえてこないのです。

この二〇年、日本が欧米諸国より際立って先行しているものは何か、あるいは特徴としているものは何か。

そんなことから、ここから読んでくれた人のなかには、経済動向の分析にかかわっている人がいるにちがいない。そこでそのあたりのことにひとことだけ触れて先にいきたいと思います。

経済の側面からそれを明らかにする必要がある、その中でたとえば「少子高齢化」「需要不足」「過剰貯蓄」「中小企業」「生産性低迷」「団塊世代」・・について論じています。しかし最もたいせつなことは、他との比較がしづらいあるいはできない特徴を、歴史や社会動向を通じて抽出して、仔細に検証しなければならぬのです。

それが何かとなれば、なによりもここで本稿が課題としているのは、史上初の日本型「高齢化問題」であり、そのうちの「高齢社会対策」なのです。

「高齢化問題」と経済の相関関係についてはすでに多く論じられてきましたが、「高齢化問題」

には「高齢者対策（ケア）」と「高齢社会対策（参加）」とがあり、「高齢者対策（ケア）」のほうは「医療」「介護」「福祉」「年金」などで、財政上の負担増に対処しながらどの国も成果を示してきました。とくにわが国は、医療の面ではノーベル賞の医学・生理学賞を受賞する人が何人も出るほどの貢献を残していることで知られます。

一方の「高齢社会対策（参加）」はどうでしょうか。

これは各国の国内事情によるものなので数値の比較はしづらいのですが、それゆえに重要で、高齢者意識の醸成、就労による高齢者にふさわしいモノやサービスづくり、居場所・通い場所の設置、生涯学習のしくみ、「世代交代」ではなく「世代交流」、暮らしや介護やエンディングを含む地域での「助け合い」、住居や移動の問題そのほかがあります。

ひとつ「労働力減少」の問題を取り上げてみても、単純に「高齢化率」（六五歳以上の人口比率）の高まりとともに「労働力減少」が指摘されていますが、本稿の「長寿社会Ⅱ 三世代（青少年・中年・老年）平等型社会」の形成の過程に即していえば、高年世代によるすべての世代のための社会づくりであり、鍛えられ磨き上げられた生活感性と積み上げられた知識と培われた技術とが活かされて、新しいモノ・サービスが造出され、新しいしくみが創出されることになりす。だからいわれるように社会の総体としての労働力減少にはならないし、新たな経済効果が見込まれているのです。

「失なわれなかった二〇年」、これまでになかった新たな価値の創造が各分野、各所でおこな

われて、新世紀の今ころは、高齢者のみなさんは新しい居場所に集い、優良な国産品に取り巻かれて過ごし、後人に敬愛されて、生き生きと活動を展開しているはずでした。

みなさんは疑問に思いませんか。

ノーベル賞の他の部門はすべてにノミネートされ受賞しているのに、経済学賞には日本経済を対象としてその気配すらないことを。一九七九年に「ジャパン・アズ・ナンバーワン」と評価されて国際的に関心をもたれていた日本が、その後どこかで路の選択を間違えてきました。だれかが間違えた別の路を選択し、それが高齢社会対策の延滞を生じ、増えつづけてきた高齢者の保持する知識・技術・資産・人脈などの無視、軽視を生じてしまい、それらを萎縮（デフレーション）させずに継続して活用することでありえた経済社会の不在を招いているのです。

#### \*二〇年の「迷路」からの脱出口

新世紀にむけて「長寿をすべての国民が喜びの中で迎え、高齢者が安心して暮らすことのできる社会」（前文）をめざすとして、「高齢社会対策基本法」（村山内閣）が制定されたのが一九九五年一月であった。次年の一九九六年七月には、中期目標としてなすべき事業を掲げた「高齢社会対策大綱」（橋本内閣）が閣議決定されています。高齢化先進国のフロント・ランナーとして、国際的にもいいスタートを切ったのでした。

「大綱」はそののち五年ごとに見直され、「小泉内閣」（二〇〇一年）と「野田内閣」（二〇〇

一二年）では改定されています。にもかかわらず、国のなすべき事業として毎回取り上げられてきた高齢社会対策は進んでこなかったのです。それが本稿のいう「失われた二〇年」であり、高齢者三四〇〇万人の経済社会への不参加によるさまざまな影響がすでに露呈しているのです。なすべき対策が分かっているにもかかわらず、「社会保障」財政は雪だるまのように国家財政の赤字を拡大しつづけてきました。赤い色の雪だるまなどというものは世に「ありえないもの」です。

一人ひとりの高齢者は、長年にわたってみずから努めて培ってきた「健康」「知識」「技術」「経験」「人脈」をたいせつに保持して暮らしています。みずから努めてきて得たものですから、その総体はご本人にしか分からない。外からでは見え、ご本人にしか知れない。「熟練技術」や「専門知識」や独自の「構想」などが、多くは退職して「余生」を過ごすあいだに社会的に活かされずに失われているのです。あまりに惜しいではありませんか。

大事なので繰り返しますが、一九九五年一月に、村山富市内閣が「高齢社会対策基本法」を制定し、翌年の一九九六年七月に、橋本龍太郎内閣が具体的な中期指針である「高齢社会対策大綱」を閣議決定しました。実務を遂行したのは時代感覚に優れた官僚と若手学者とでした。一九九九年の「国際高齢者年」のフォーカルポイント（窓口機関）として全国展開したのも当時の総務庁高齢社会対策室でした。ここで見落としていけないことは、それらの事業に底流しているのは、時代をつくってきた先人への感謝であり、慰労し敬意をもって功労者を遇

しようとする官僚や学者の「善意」であるということですが。

それから二〇年。だれもがつつがなくそれぞれの二〇年をすごしてきたように見えます。

しかしその間、「大綱」にあるようには政治の側は事業を動かさず、増えつつける高齢者に「人生八〇年」といった高齢者意識を、すべての国民に到来する長寿社会への意識を醸成する「高齢社会ブランドデザイン」を掲げることにはしなかったのです。

それが年々増えつつける高齢者の将来への不安を醸成し、その経緯が裏返って家計資産を一四〇〇兆円にまで積み上げてきたのです。将来にむけて参加すべき事業が明解であれば、国民とくに元気な高齢者は積極的に参加し、保持する「健康・知識・技術・経験・人脈・貯蓄」を活かして社会の活性化に貢献できていたはずなのです。

したがって延滞の要因も責任も政治の側にあります。しかし主因は何事もせず過ごしてきた国民の側にもあります。そしてその延滞により露呈してくるすべてのツケを受けるのは政治家ではなく高齢者なのです。

あれから二〇年。まことに残念なことですが、政争や「世代交代」の嵐のなかで初めの一步を誤った「高齢社会対策」は、出口のみえない迷路にまぎれこんでしまったままです。

本来なら二〇年の節目に当たって、経緯を振り返り、成果を確かめ、しっかりと将来を見据え直す行事が政府筋からあってもいいところですが、その気配は見られませぬ。

バブル崩壊はあったものの、底流している「日本社会」の姿をしっかりと見据えて、金融・

財政政策で支えるとともに、高度成長を成し遂げたあとにも元気な高齢者層を含めて、「三世代平等型社会」の形成に努めることができなければ、今ごろ「一億総活躍」をいい出しながら三四〇〇万人の高齢者を無視するような政策はとらなかつたはずでず。在りうべき社会に向かつていけば当然に、ノーベル「医学・生理学賞」ほかの業績とともに、「経済学賞」でノミネートされる経済学者も出ていたはずなのです。

二〇一二年末の組閣以来、「女性と若者の成長力」に期待し優先してきた安倍晋三首相は、二〇一五年九月に「一億総活躍」を呼びかけたものの、高齢者層に対してはなぜか際立った参加要請をしていません。「迷路」にはまってしまった政界からは、もはやこの国の高齢社会の姿が見通せなくなっているんじゃないでしょうかありません。

ではだれがそれを見通しており、どうすればこの国の経済社会の姿を国際的本流にもどすことができるのでしょうか。ともにここまでたどり着いてくれた読者のみなさんとともに、熟慮して訴えて実現に努めたい。

### 高齢者はすべて「社会の被扶養者」か

今世紀の国際的な潮流が「高齢化」であることを知り、とくに注目される先行国として、新しい社会のしくみづくりをどこまで議論して実施してきたのでしょうか。

とくに政治リーダーは、高齢の有識者とともに議論して、高齢者意識の醸成、就業、健康づ

くり、社会参加、学習活動、生活環境、市場の活性化、全世代の参画といった各分野ごとに、なすべき活動を仔細に検討し、国民に「グランドデザイン」として提案してきたでしょうか。国会議員は衆議してえた「高齢社会グランドデザイン」を、増えつづける高齢者に呼びかけながら実現に務めてきたのでしょうか。

この歴史的にも国際的にも重要な世紀の変わり目の時期に、当時の首相は「所信表明演説」(二〇〇一・五・七)で高齢者にむかって何と叫びましたでしょうか。

将来の高齢者増による「ケア」の負担増を取り上げて、「給付は厚く、負担は軽く」というわけにはいきません」と言い切ったのです。このときに「長寿をすべての国民が喜びの中で迎え、高齢者が安心して暮らすことのできる社会の形成」(「高齢社会対策基本法」前文)へむかうはずであった活動のすべてが萎えてしまったといっている。この責任は重い。

発言が間違っているといっているわけではなく、発言の対策が「高齢者対策(ケア)」であり、「高齢社会対策(参加)」でなかったことに問題があるのです。予算折衝に当たったの焦眉の急が、高齢弱者の人びとへの善意の「福祉・介護・医療」と「年金」だったことはだれにも確かではありませんが、それとともに、

「元気な高齢者のみなさんは社会の支え手になってほしい」

とひとこと訴えて、将来の財政難を説きつつ、増えつづける元気な高齢者層に「自助・自立・参加」意識を醸成するとともに、高齢者みずからが暮らしやすい社会の創出を官民協働で進め



るよう訴えるのが政治リーダーの構想力だったのではなかったでしょう。構想力のあった首相といわれていただけに、「所信表明演説」を聞いて、天を仰いで慨嘆した官僚や学者や高齢社会活動家やジャーナリストや多くの高齢者がいたはずですよ。

このままですと、これは記したくないのですが、

「年老いて負担がかさむと考える心優しい高齢者が、善意で死に急いでくれて、日本高齢社会は思いのほかスムーズに形成できました」

なんてことにならざるをえないのではないかと思われました。

新世紀のはじめに、先の「所信表明演説」をしたのは、時の小泉純一郎首相です。そして二月には橋本内閣以来の「大綱」の改定を閣議決定しているのです。さらに「世代交代」の大合唱のなかで、優れた大物高齢政治家までを年齢で区切って、政治の舞台から追い払ってしまったのもこの人でした。

いま「原発の全面禁止」を訴えておられますが、「高齢社会対策」の延滞をもたらした政治リーダーを代表して過ちを認めて、ここはみごとな「君子豹変」ぶりをみせてほしいものです。

#### \*みんなで渡った「霞が関の赤信号」

今世紀のはじめに、政界の「世代交代」（世代交流ではなかった）の突風にあおられながら、チルドレンを誘導して「霞が関の赤信号」を渡ったのは、かつて優れた厚生大臣と評された小

泉首相でした。その後の内閣は、七年にわたった「一年一相」時代を含めて、迷路のなかをさまざざ迷いつづけているのです。

アベノミクス（女性と若者優先の成長経済）は、もはや論外のところまでできているのです。この間、高齢者は何の恩恵も受けず、広がった格差の底で、

「この国の将来の姿はもう見たくない。孫、子に少しでも遺産を残せるうちに死にたい」

とつぶやき、エンディング・ノートを書くような国をだれが望んだだろう。今世紀に入っても政治リーダーは、「高齢者は社会の被扶養者である」と位置づけて、予算の措置には努めたものの、一〇年後、二〇年後の「高齢社会」の姿が構想できなかったのです。

「医療・介護・福祉・年金」といった施策では国際的水準で評価を得たし、平均寿命や健康寿命では世界トップの成果を示しています。これら「高齢者対策」については率直に世界に誇っているでしょう。

しかし先の小渕内閣で5%の「消費税」導入のとき、「社会保障」のための完全目的税にするよう当時の宮澤（喜一）蔵相を説いて認めさせた藤井（裕久）氏は、「そういう構想力は政治リーダーにはなかった」ともらしてくれました。

政治家にはなくとも、官僚と学者にそういう認識がなければ「高齢社会対策大綱」の改定はできなかつたはずで。二〇〇一年一二月、小泉内閣は五年ぶりの「高齢社会対策大綱」の改

定を閣議決定しているのです。その記述の中に、なすべき対策は埋めこまれているのです。政界が若手からの「世代交代」の要請の渦中にあっただとはいえ、官僚と学者が時代を底流している「高齢化」の状況に想像力が働かなかったわけではないでしょう。想像力が働かなかったのは政治の側でした。そういうわれても弁解の余地はないでしょう。

### 九割中流からの急転直下

「失われた二〇年」を隠しおおせずに実例として露呈してしまったのが、「老後破産」や「下流老人」の存在です。

ここでも繰り返しますが、「長寿をすべての国民が喜びの中で迎え、高齢者が安心して暮らすことのできる社会」を前文に掲げた「高齢社会対策基本法」がそらぞらしく聞こえます。「高齢社会」の現状に対して高齢者からではなく、現役世代の将来不安を契機にした報告が話題になったのです。

本のタイトルが『老後破産』であり、サブタイトルが「長寿という悪夢」です。

二〇年前にめざした「基本法」の理念を逆なでするようなこのキャッチコピーが、本が売れない時代にウリを立てるためのワル知恵で、「老後」や「長寿」のすべてではなく限られた条件のものであることを百も承知で付けたとしても、制作者としての「貧性」を問いたいですが、反響に包まれている間は言っても遠吠えにしか聞こえないでしょう。

いま、ひとり暮らしの高齢者に何かが起きています。その経緯はわからないが現場からしか議論は始まらないと決めて、NHKスペシャル取材班は現場にはいった。

議論の切り口は「経済的困窮」です。タイトルにしているキーワード「老後破産」とはどういう境遇の高齢者をいうのかというと、

——ひとり暮らしの高齢者で、収入が生活保護水準（月約一三万円）を下回っていても生活保護を受けていない（受けられない、受けようとしたくない）人で、預貯金の蓄えがないか乏しく、年金（国民年金六万五〇〇円＋）だけでギリギリの生活をつづけている人。だから病気になつたり介護が必要になつたりすると、とたんに生活が破綻してしまう——

こういう境遇の高齢者を対象にし、番組（NHKスペシャル）のプロデューサーが「老後破産」と呼ぶことにしたという。ざっと二〇〇万人余がおり、増えつづけているという。「長寿という悪夢」のサブタイトルには、生きつづけることで追い詰められていく（「預金ゼロ」へのカウントダウンも）現実の苦しさ、厳しさ、虚しさが込められています。これでは長寿の日々が楽しいはずがない。それが取材の前提でした。

「失われた二〇年」は、九割中流をなしとげて高齢者になつた功労者を、「下流老人」と呼ばれる境遇にするには十分の長さであった。

NHK取材班は、さまざまな問題をかかえて「老後破産」寸前にいる高齢者を対象に選んで、個人の喜怒哀楽の声を聞いていく。

——必死で働いてきたのに報われない老後——

だれもが口にするこのつぶやきは、二〇〇万人にとどまるものではないでしょう。

都営団地に住む八〇代の菊池幸子（仮名）さんは、その典型のような暮らしをしている。

菊池さんは八年前にまだ独身だった四〇代のひとり息子を失った。そして三年前には夫をガンを失って、ひとり暮らしになった。夫の生前はふたりで一三万円ほどの年金で暮らしていたが、その後は毎月八万円（国民年金六万五〇〇〇円十）に。

専業主婦だったから厚生年金はない。経費は家賃（一万円）、介護サービス（三万円、要介護二）、生活費（公共料金を含む、七万円）で、毎月必ず出る三万円ほどの赤字を預金（残り四〇万円になった）を取り崩して充てており、「老後破産」へのカウントダウンがつづいています。菊池さんにしてもそうだが、「多くの高齢者はその権利（生活保護）を行使しようとしないと取材者は感じ取っています。

——「贅沢は敵」とばかりに、出費を切り詰め、耐え忍んでいる。生活保護を受けることは、「国の御世話になること」でもあり、罪悪感を伴うと訴える声も多い——  
と実情を報告する。

取材の対象は八〇代が多いですが、この年齢層の大正から昭和初年生まれの高齢者は、戦中・戦後のきびしい暮らしを自立してしのぎ、その後も自分のために貯蓄などせず、みんなが等しく豊かになるために努めてきた。そういう人びとのおのずからの善意が歴史にまれな九割中流

社会をつくったのではなかったでしょうか。

菊池さんの夫は工務店の主人として、働く人たちが豊かになることに配慮し、自らの老後のための預金を積むことなど考えていなかったでしょう。そういう「みんなが等しく豊かに」を貫いてきた人びとの人生を、最後まで保てるような「高齢社会対策」を講じないできて、「生活保障」という配慮の浅い「社会保障」で対応する政府も自治体も信用されていないのです。戦争と戦禍を経験し、一日でも長く生きることの命の尊さを知る人びと。その願いを閉ざして、「もう生きたくない」と吐露せざるをえないような環境に置かれているのです。

——一生懸命に働き、一生懸命に生きてきた普通の人たちが報われない、それが今の日本の老後の現実なのだ——

というところに結論は行き着かざるをえないのです。

こういう社会を呼び寄せてしまった責任はだれにあるのか明らかです。その責任は重い。

#### \*「老後破産」と「下流老人」

一方、「下流老人」というタイトルは、筆者の造語だといいます。筆者は、さいたま市で一二年間、生活困窮者の支援をしてきた三〇代のNPOの運営者（ソーシャルワーカー）であり、年間三〇〇人ほどの生活困窮者からの相談を受けている。そのなかで多くの高齢者の困窮した惨状をみてきました。

「下流老人」というのは、「生活保護基準相当で暮らす高齢者およびその恐れがある高齢者」と定義していますが、実感の裏打ちがある巧みな造語です。いいかえれば、国が定める「健康で文化的な最低限度の生活を送ることが困難な高齢者」です。

そして三つの「ない」が指標とされることになります。

収入が著しく少ない。十分な貯蓄がない。頼れる人間がない。

つまりあらゆるセーフティネットを失った状態をいいます。

上記の『老後破産』と同様の趣意で同じところに発刊されましたが、両書ともベストセラーになっていきます。上記書と違うところは、親世代だけの問題ではなく、「介護離職」などで子ども世代が共倒れすることや、少子化を加速させる（子どもがいなければ十数年間は下流にならずにすむ）といった次の世代への影響を指摘しているところにあります。

「自分がこんな状態になるなんて思いもしなかった」

とつぶやくのを、筆者は相談にきた高齢者が異口同音に聞いています。

老後の貧困は想定外の事態であり、立ち至った事由はもともと貯蓄がなかったり、思いのほか年金が少なかったり、親の介護で職を辞めたり、同居の子どもが病気（うつ病）だったり、自分が大病をしたり、といういろ。事由は個人的にみえますが、社会のしくみの問題であり、全世代にかかると問題を提起しています。

「下流老人」は、姿を見せないようにして隠れているといえます。そしてとくに一定の年代よ

り上の人は「オカミの世話になりたくない」という意識が根強くあると指摘します。筆者はそのような考えに到ってしまった過程に目を向け、生活保護を受けやすくすることが必要と訴えています。一定の年代より上の人が「オカミの世話になりたくない」という意識をもつことに気づいています。

たしかに大正期から昭和戦前の生まれの人は「オカミの世話」を信用していない。戦争を起し、自由を奪い、若者の命を奪い、戦禍の苦しみをもたらしたからです。戦後もとくに「オカミの世話」を受けずにみんなして働いて豊かになった。その成果を、「一定の年代より下の人」は不安な将来の老後のために貯蓄することで守ろうとします。

筆者は、現実の声を聞き、さまざまなケースを統計類を駆使して一般化し社会化することで、読者の納得をえることに苦心しています。「一億総中流」社会がこのまま放置したままだと、いずれ「一億総下流」の時代がやってくると、危機感をもって受け止めています。

いずれにしても率直にいえば、こういう本は現役世代によって出されてはいけない本であり、売れてはいけない本なのです。

## □ 高齢社会対策担当大臣に責任 意識やしきくみを変える対策が急務

「高齢社会対策」に関する「大綱」の事業の延滞で、「基本法」を制定した村山富市氏を責める



わけにいきません。いまも現役で元気に過ごしておられる高齢者の星、村山さんには、制定時の志を思い出していただければそれでいい。それ以後の政治リーダーに責任はあるのです。

翌一九九六年七月には、橋本龍太郎内閣によってその実現への指針として「高齢社会対策大綱」が閣議決定されています。橋本さんにはその後も実現への志を見たのですが、残念ながら早く世を去ってしまいました。それ以後の政治リーダーに責任はあるのです。

「基本法」も「大綱」も、双方とも当時の優れた構想力のある国家官僚と学者の創意によって起草されたものであり、策定した人たちは新世紀のはじめにみずからが高齢者として「喜びの中で安心して暮らす」姿を想定していたに違いありません。

いまやその達成にむかっていないことを感じているはずです。

政治の側の責務として、国際的にみてもわが国の「高齢社会対策」はいいスタートをきったのですが、いまや目標を見失っている状態なのです。周回遅れか途中棄権といってもいいすぎではない状況にあるといえるでしょう。

「高齢社会対策大綱」の策定の目的にはこうあります。

「二一世紀初頭の本格的な高齢社会を目前に控え、国民の一人一人が長生きして良かったと実感できる、心の通い合う連帯の精神に満ちた豊かで活力のある社会を早急に築き上げていくためには、経済社会のシステムがこれにふさわしいものとなるよう不断に見直し、個人の自立や家庭の役割を支援し、国民の活力を維持・増進するとともに、自助、共助及び公助の適切な組

合せにより安心できる暮らしを確保するなど、経済社会の健全な発展と国民生活の安定向上を図る必要がある」

と。さすが策定者である優れた官僚は、このワンセンテンスの中にそのエキスをすべて詰め込んでいます。しかし推進者は国民から選ばれてその役割を付託されている政治家であり、なかでも政治リーダーです。

どの顔を思い浮かべても、この「大綱」の文章を読んで、「官僚の文章はごちゃごちゃしていてよくわからん」といって投げ出してしまったような気がします。読みもしなかった人もいたのかもしれない。いずれにせよ、経済大国を成し遂げて、成熟・円熟期にある人びとに、「高齢社会」達成への参加要請をした政治リーダーを知りません。

### \*高齢化事業延滞の責任者さがし

事業延滞の犯人さがしをつづけましょう。

安倍首相は唐突に「基本法」から制定二〇年目にあたる二〇一五年九月に「一億総活躍」をいい出しました。そしてご存じのように、一〇月の内閣改造で「加藤勝信・一億総活躍担当大臣」を登場させました。オールジャパンをいうのですから、当然のこと、知識も技術も資産も持っている高齢者層への参加を呼びかけるものと発言を待ちましたが、そういう趣旨の後追い発言はしませんでした。延滞責任の先端か末端かにいることを意識していないのです。

任命を受けた加藤勝信担当大臣は、大急ぎで各省の担当官僚を集めて、霞が関からの視野にはいる人材によって「国民会議」を発足させました。その急場しのぎの手法にぬかりはないのですが、ただし国民の四人にひとりに達した高齢者（六五歳以上、約三四〇〇万人）が持つ潜在力の活用を要請できる広い視野で、「国民会議」のメンバーに高齢有識者を探した形跡がありません。

「一億総活躍国民会議」のメンバーに、本誌にも登場していただいた何人かの方が代表として参加していないのがその証です。高齢世代の人の声が反映されなくては、オールジャパン・オールエイジズの議論にはならないのではないのでしょうか。

歴史の裁断はまぬかれえないでしょう。

新世紀の一五年、高齢者が四人にひとりになる時期までの対策の延滞は、「九割中流」社会を達成した功労者である人びとを、高齢期になって「下流老人」にするには十分でした。今世紀のはじめから着々と対策を講じていけば、「下流老人」現象は露呈しなくて済んだプロセスなのです。そうできなかったのは他の道を選んだということであり、それは政治リーダーである歴代総理の責任であり、直接的には歴代の「高齢社会対策担当大臣」の責任であることに疑いの余地はありません。

もうひとり、一九九九年に都知事になった石原慎太郎氏は、一〇月一日の「国際高齢者の日」の東京での記念行事で「あいさつ」をしているのです。ご自身の人生に今もっとも関係する「高

「高齢社会」形成への政治家としての責務も見直してほしいものです。七四歳の小泉さんと八四歳に達した石原さんの「君子豹変」する姿は見てみたいものです。

一九九六年以後、毎年の『高齢社会白書』の公刊を担当してきた大臣はもろろんみな同罪です。そしていま、その責任は誰にあるのでしょうか。いうまでもなく「一億総活躍担当大臣」であり「高齢社会対策担当大臣」でもある加藤勝信担当大臣にあります。

といわれて、加藤大臣ご本人すら実感がありませんし、納得がいかないでしょう。二〇年の延滞で、政界における責任はそこまで希薄になっているのです。

問うのも恥ずかしいことですが、消費税論議の最中であった二〇一二年九月に一一年ぶりに「高齢社会対策大綱」が、閣議決定（野田内閣）して改定されました。高齢社会にかかわる財源とともに実態にかかわる「大綱」の改定内容に気がついた政治家がどれほどいたのでしょうか。「大綱」の重要な改定点は「人生六五年」を二五年延伸させて「人生九〇年」への意識の醸成を求めていること。と同時に、**就業、健康づくり、社会参加、学習活動、生活環境、市場の活性化、全世代の参画**といった各分野への「**支え手の高齢者**」の参加を呼びかけていることにあります。

別の章で詳しく述べますが、青少年（成長期）＋中年（成熟期）＋高年（円熟期）の「三世代平等」の意識を醸成しつつ、オールジャパン、オールエイジズ社会をめざすこと。

二〇年の対策の延滞を取り戻した上での「日本高齢社会」の創出は今ならまだ間に合うので

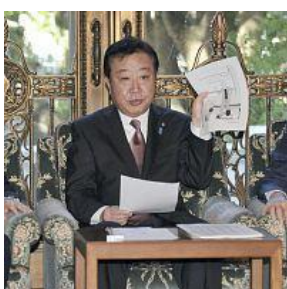
す。高齢者が四人にひとりになった段階からの成功事例としての「日本高齢社会」達成への道は閉ざされてはいません。本稿はここに、新世紀一五年の経緯をつぶさに見てきた立場からの一つの救済策を示そうとしているのです。

## 二〇一二年に「大綱」を改定

「基本法」の目的にむかつて「大綱」の取り上げる諸事業を実現しなかったのは政治家ですが、そうさせなかったのは国民です。

高齢者への国の対策の指針となる「高齢社会対策大綱」は五年刻みに見直され、その改定が二〇一二年九月におこなわれましたが、自分の人生にかかわる重要な改定の内容なのに、高齢者のみなさんはおそらく知らないでしょう。

一九九九年に「国際高齢者年」がありました。二一世紀にはもはや世界規模での大戦争が不可能になり、平和のうちに世界規模での「高齢化」がすすむとして、国連が二〇世紀末に設定したものです。際立って急速に「高齢化」がすすむわが国では、ここを機会にして、新世紀にトップランナーとして迎える「高齢社会」の構想、国際的な視野での「高齢社会ブランドデザイン」を衆議して掲げるチャンスだったのです。



国としてはそれがありませんでした。高連協が独自に「高齢者憲章」を起草しているのが知られる程度です。

二〇〇一年末に「対策大綱」は関係官僚と学者とによって見直しをしていますが、その後も見直した事業は進まなかったのです。一方で世代交代をすすめて高齢政治家を排除し、チルドレンを呼招した小泉総理の責任は免れえないでしょう。

二〇一二年改定の「大綱」（野田内閣）にはなすべき事業として、「人生九〇歳意識」の醸成や、就業、健康づくり、社会参加、学習活動、生活環境、市場の活性化、全世代の参画といった分野ごとに具体的課題が記されている。有識者の検討会（清家篤座長）が提言をし、関係省庁が見直し、内閣官僚がまとめた「新大綱」を閣議決定した野田総理の責任も明らかです。

「高齢者意識」に「人生六五年」から「人生九〇年」へと一足飛び二五年の延伸を生じていることから知れるように、歴代内閣が事業の継続性を軽視し、新世紀一五年の「高齢社会対策」の延滞（強くいえば政治不在）がつついてきているのです。

安倍内閣は際立ってそう。みなさんもお気づきのように、安倍総理は女性と若者の「成長力」とくに女性に期待して、ことあるごとに参加を呼びかけていますが、「成熟力＋円熟力」を持つ高齢者には言及がありません。新世紀歴代の政治リーダーは、「高齢者」は「支えが必要なる人」という固定観念を持っており、「社会参加」に意欲と能力のある人びとに「支え手」に回

つてくれるよう意識改革を図ることもなく、「大綱」が列挙している分野での対策を講じることもなかったのです。

高齢者への敬愛の思いが薄れていくと感じている高齢者が多いのは、こういった社会対策の延滞によるところが大きいのです。

\*情報を知らされない高齢者

高齢者のみなさんは正確に言えば知らされなさすぎます。そこで知らなすぎるのです。

あの大震災があった二〇〇一年の一月に、民主党政権の蓮舫担当大臣（蓮舫議員が「少子化」と併任の「高齢社会対策担当大臣」だったことを、どれほどの人が知っていたでしょうか）のもとで、有識者検討会（座長清家篤慶応義塾大学長）を立ち上げて報告書を作成、その後、内閣官僚の検討を経て、二〇〇二年九月七日（このときは中川正春担当大臣）に閣議決定をしました。内閣はもちろん民主党の野田（佳彦）内閣です。二〇〇一年の小泉（純一郎）内閣以来の一年ぶりの「対策大綱」再見直しでした。

残念なことですが、多くの国会議員が高齢社会対策の担当大臣がだれかを知らず、内閣府に専任官僚がない（併任ばかり）というのが現状です。「対策大綱」を練り

上げ、改定した有識者と内閣官僚には重要性を増していく課題と分かっている、肝心の政治リーダーにその認識がなかったことの証をここにも見ることができません。今回も一年ぶりに内閣府で「対策大綱」の改定を検討しているというのに、衆参両院議員は何をしていたのでしょうか。日々、まことに熱心に「社会保障」費の財源となる「消費税増税」というおカネのほうの議論をしており、肝心の高齢社会の具体的なありようについては、ほとんどないといっていいほど関心が薄かったです。

ですからマスコミ報道も閣議決定のその日かぎり、内容については多くの国民の知るところとなりませんでした。無理もないことですが、若い厚労省クラブの現役記者は、「高齢社会対策」については「認知症」ほどには肝心な問題として認知していないからです。

### 歴代の「対策担当大臣」に責任

責任者であった「高齢社会対策」の担当大臣を見てみましょう。

毎年出されている『高齢社会白書』（内閣府刊行）の閣議への提出者をみると、平成二一年度版は小淵優子大臣が、二二年度版は福島みずほ大臣が、そして二三年度版は蓮舫大臣、二四年度版は小宮山洋子大臣、二五年度版・二六年度版は森まさこ大臣、二七年が有村治子大臣が閣議決定



時での担当大臣となっています。連ねてみると明らかに「少子化・高齢化」を合わせて担当する人選であり併任であり、それも「少子化対策」の方が主であることが知られます。

民主党政権時代だけで九人の担当大臣がいました。そのことを議員どころか閣僚どころか本人すら知らなかったのではないか、と思われるほどなのです。

参考までですが、九人というのは、福島みずほ、平野博文、荒井聡、岡崎トミ子、村田蓮舫、細野豪志、村田蓮舫（再）、岡田克也、中川正春各議員です。中川議員が「高齢社会対策大綱」改定時の担当大臣でした。時節がらその重要性を知っていれば、少時とはいえ内閣改造時に併任で担当となった岡田副総理は、おそらくそれ相応の対策をとったことでしょう。

これは記すのをためらいますが、改定した「高齢社会対策大綱」を閣議決定した野田（佳彦）総理でさえ、高齢者の活動がいまの社会にもたらす有意な影響には触れていますが、それが高齢者自身の実人生を活発にし新しい社会の形成に向かう力になることには触れていないのです。五五歳の若き総理には高齢者の実人生には理解が及ばなかったようです。それは六〇歳の安倍総理にもいえることです。

#### \*内閣府に専任の担当大臣を置く

担当大臣としてしごとも少なく、予算も少なく、組閣時に「高齢社会対策担当大臣」として辞令も出ないために、恒例の組閣後の記者会見でも関連する質問が生まれません。「**日本高齢社会**」

の形成は国際的にも歴史的にも大事業なのに、今世紀にはいつてからの歴代リーダーはその重要性を認知しないままできています。

内閣府内部の扱いも「共生社会政策」の一分野として、内閣府政策統括官（共生社会政策担当）が担当しています。「高齢社会対策担当」の参事官や政策調査員がいるにはいますが、兼務だったりしますから、「高齢社会対策」を担う太い導線が内閣府内に整っているとはいえませんが、要するに内閣府内の主要な職務として扱われなくなってしまうって久しいのです。

「高齢化」を一過性のものとし、「少子化」を恒常的なものとする施策は、この国の将来を二重に誤ることになるのです。

遅れを取り戻すには、まずは内閣府内に「高齢社会対策」を担当する太い導線を形成して、高齢社会推進のしごとを進めねばならないでしょう。「スポーツ庁」よりは「高齢社会庁」の設置が先なのです。世紀を通じた国際評価につながる「高齢社会対策」を重視すべきときなのにもかかわらず、国会議員はなおその重要性に気づこうとしないのです。

全国津々浦々から三四〇〇万人の高齢者が、衆口一詞の声を合わせて、

「高齢社会対策の専任大臣と強力な部局を！」

「日本高齢社会ブランドデザインを掲げよう！」

と叫ぶ必要があるのです。世界の高齢者が期待する「日本高齢社会」形成への新

たな烽火を掲げるべき時であり、時は切迫しているのです。

## 目 広がった亀裂と格差

### 犍陀多(カンダタ)の話

「カンダタって知ってるよね」

と若い人に聞いたたら、きつと「ドラゴンクエストの悪役キャラでしょ」と応じるでしょう。

「その元ネタになった芥川龍之介の犍陀多(カンダタ)のほうなんだが」

といい添えれば、記憶の糸をたどって、かつて国語の教科書で読んだ芥川龍之介の『蜘蛛の糸』の主人公を思い出してくれるでしょう。

大正七年(一九一八年)の作品というから一世紀ほど前のことになるが、芥川龍之介が子ども向けの雑誌『赤い鳥』創刊号に書いた童話の主人公のことです。

お釈迦さまが出てくる話ですから一〇〇年なんか昨日みたいなものですが、芥川はお釈迦さまがおいでになる極楽とその対極である地獄との間で、一筋の蜘蛛の糸にすがっている犍陀多を主人公にする童話を書いたのです。もちろん天上が極楽ですから、蜘蛛の糸は極楽から地獄へと垂れてきたもので、犍陀多はその糸にすがって地獄から極楽への途中にいます。

本人は覚えていないのですが、悪党だった犍陀多がかつて一匹の蜘蛛を踏みつぶさずに助けてやったことがあって、そのことからお釈迦さまは仏界から一本の蜘蛛の糸を下ろして、地獄

であえいでいた犍陀多を救ってやろうとなされたのです。上へいけば極楽へたどりつき、落ちればまた地獄という中間で、犍陀多が下をみると、蜘蛛の糸にすがって蟻のように後から後から罪びとたちが昇ってきます。

極楽へつながるのは一筋の蜘蛛の糸。そんなにたくさんさんの人の重さに耐えられずに糸は切れてしまう。

とっさに「自分だけはなんとか」と考えた犍陀多は、「下りろ、下りろ」とわめいたのです。と、そのときに糸は切れて、犍陀多は地獄へ落ちていきました。悪党だった犍陀多なのだから、とっさに自分の下で糸を切ることくらい思いついたとしても不思議ではないのですが、作家は犍陀多にそんなことをさせるいとまを与えずに犍陀多の上で糸を切ったのです。

じつは芥川の「蜘蛛の糸」の話には元ネタがあって、鈴木大拙が訳したポール・ケラサ著『カルマ（因果の小車）』から得ているのです。やはり仏陀に「この糸を便りて昇り来たれ」といわれて、犍陀多は極楽へむかいます。が、後から後から糸にすがって昇ってくる人びとに気づいて「去れ去れ、この糸はわがものなり」と絶叫するところで糸が切れて地獄へ落ちていきます。

地獄へ落ちていく犍陀多を見る鈴木大拙と芥川龍之介とが感じていたところは同じではないでしょう。それを論じることまでできるのですが、ここでは芥川のほうのモチーフに限って追ってみたいのです。それは芥川が原典にはない極楽の蓮の池の傍らを歩いているお釈迦さまを登

場させて、犍陀多のようすを書いていることにも見えています。大拙はそんなことをしないし、できません。大拙が関心を持つのは凡夫としての犍陀多の心の動きだからです。

芥川が極楽と地獄という対極を明確に示したのは、おそらくは当時、鋭敏な作家の眼の前で広がりつつあった「格差」を表現したかったからにちがいないからです。

そんなことに気づくこともなく、当時もその後も「蜘蛛の糸」を読んだ子どもたちは、率直に単純に「自分だけはなんとか」と考えてはいけないうちだと思ふことで作品のモチーフに納得していたにちがいません。が、複雑な人生を歩んでいるおとなたちの中には、これを読んでそうは思わなかった人もいたでしょう。衣と食と住には安心でも、芥川が表現するように極楽は日々を過ごすには単調でつまらなそうに思えたということ。極楽にいつても自分を理解してくれるような仲間はいないだろう。それなら極楽までたどる途中に他に何か別の世界があるはずで、そこで下からくる連中に糸をくれてやって途中下車してもいいと思ったことだろう。俗世の凡夫としては「自分だけは」という犍陀多の心の動きを素直に納得して、自分もまた地獄に落ちてもしかたがないと思つたことでしょう。ご葬儀での長いお経のあとの説法で、仏弟子の目犍連（もくけんれん）が餓鬼界にいる母親を助けにいった話など聞かされていたらなおさらです。

\*また大震災に遭遇して

その後の大正一二（一九二三）年に起こった関東大震災は天災による地獄でした。家族をちりぢりにし、住居を奪った天災。さらにその後の日中戦争・太平洋戦争は人禍による地獄をもたらしました。芥川にその後起こった「人禍」がどこまで予見されていたかは知りませんが、大震災に遭遇した後、「唯ぼんやりした不安」に襲われて昭和二（一九二七）年に自死することになりました。だから、将来の生ききれない時代と人生を予見していたことは確かです。

「天災人禍」である関東大震災と「唯ぼんやりした不安」、そのあとの日中・太平洋戦争。

いま「3・11」東日本大震災のあと、世に「格差」が広がるなかで、「唯ぼんやりした不安」に襲われている多くの国民。信頼からほど遠い政治状況。一〇〇年をすごしてそれがまた、わたしたちの眼前に再現しつつある現実です。

歴史は知る者によって繰り返し、知らない者によって繰り返す。

だれにも止められないその波がやってきて、若い人が国を護るためにまた犠牲を強いられることになる気配。とすれば、次にやってくるのは、歴史に学んだ国粹化と軍国化の波。仮想敵国をつくって国民を誘導する。滅私応援はすでにプロ野球やサッカーやライブで培っています。おりしも平和を七〇年祈りつづけた明仁天皇の生前退位とともに終わる民族鎮魂の時代。

「自分だけはなんとか」と思いながら、極楽へゆくことのできない現代の犍陀多は、遠からずして地獄に落ちていくのを察知している。

「平和と平等」が国内で当たり前だった七〇年だからといって、すべての人が等しく七〇年間

を安心して生きてこられたわけではなかったでしょう。「戦争と格差」は海外で渦巻いていましたから。願わなくとも平和であればすべての人が「九〇年人生」を目標にして生きることができるとき代。しかし「六五歳」から先は「不安を抱えて」というなら酷な話。そのなかで「自分だけはなんとか」という思いで暮らすというのも罪な話。

酷でもなく罪でもない穏当な人生にならないものかということこれから考えてみようというのです。そのため近年になって「平和と平等」の地盤をゆさぶる「戦争と格差」への際立つてきた傾向をいくつかを見ていきましょう。

### 「非を飾る」若者たち

若者と高齢者。

まず若者たちと高齢者の間の亀裂から見てみましょう。

七七歳の「喜寿」を迎えようとしている上田恒一さんは長寿を喜べない。

喜べない理由はふたつ。

世相として世の中が高齢者に関心を持たなくなったこと、そしてとくに若者たちがオモシロクナイ大人の話に耳を傾けなくなったこと。

上田さんは、若者の言動はワル乗りを越えていまや「非を飾る」域にあるといいます。

「？ 非を飾る」とはどういうものをいうのですか。

「際立っている例ですけれど」と前置きをしながら、上田さんは四つの若者のことばを並べた。

「なまぬるい幸せなんか押しつけないでほしい。不幸な体験だってしてみたい」

「戦争の現場に出るなんて実感は人生の極みじゃないか」

「善意なんて何も生まない。悪意が行動のエネルギー源なんだ」

「毎日遊んでいくせして、うるさいじいさんばあさんはいらぬ。遺産を残して早く死ね」

一回きりの人生だから不幸な体験もしてみたいという若者に幸せであることを願うことはできない。戦争を避けて平和を望むことも、善意から話すことも、そして先人として存在することすらできない。

いつの世も若者の「知」は時代を先回りして待つ。

そして自分の耳に逆らうような「諫をふせぐ」ために知性が使われる。人間だれもが隠し持つ本性が露わになって、前の時代の意思を閉ざして時代は転移するものなのか。

上田さんはそう考えて楽しめないというのです。

#### \*「もう時代に関わらない」という高齢者

少年の日に自分が蒙った戦争中の惨禍や戦後の混乱。それを繰り返してほしくない不幸な体験として若い人に伝えること。上田さんはそれが無力であり無益であると思うようになったといいます。



「金輪際、わたしは関わりませんけれど」

上田さん。ちょっと待ってください。

たしかに上田さんがいうように、このところ高齢者は軽視・無視ときには蔑視までされて、実人生でも「アベノミクス成果」から恩恵も受けていない。しかし四人にひとりまで増えた高齢者の保持している知識・技術・資産など膨大な潜在力が残されています。これを發揮して新たにつくる「成熟十円熟社会」は、新次元の事業にはなりませんか？

「・・・わたしには一〇年は遅いような気がします」

まっ白くなり、薄くなった髪を撫であげながら、上田さんはそういいます。

つい先ごろ「安保法制」反対で国会前までゆき、安保世代として若い母親たちと社会参加をしてきた上田さんのような人を呼び戻す方策を、本稿の中で練り上げられるかどうか。

## IT化と「デジタル・デバイド」

時流と潮流。

世相をよくみると、たしかにこのふたつの大きなうねりが重なって新世紀の時代層を流れています。ひとつはアジア唯一の経済先進国として迎えているグローバル化の時流であり、もうひとつは先行国としての対応を求められている高齢化という潮流です。この時流と潮流のふたつの課題を持ち越して世紀をまたいだ日本でしたが、この一〇年余りの際立った変容といえ、

時流対応の「若年化」と「女性化」と「IT化」のほうだったといえます。

「デジタル・デバイド」(情報格差)がいわれます。IT機器のイノベーション(技術革新)に高齢者が追いつかないために生じる情報の差で、個人差はあっても若い世代の対応力を主とする企業側の製品化によって生じています。

だからパソコンとケイタイを駆使する若い孫娘は、いつしか「わたしが主役！」として振る舞うようになります。「世の中ますます粗悪になる」とグチりつづけて何もできない祖父を脇役とみるようになります。すぐれた高齢者である上田さんのような人でさえも、家庭内では孫娘から軽くあしらわれているのです。

激しい時流への対応が優先するのはしかたがない。

それは身近なところでは、家庭内の日用品の「途上国産化」となり、企業内の「非正規社員の増加」となって実感されています。わが国よりひと足もふた足も遅れて成長期にはいったアジア途上諸国と付き合うためのいたしかたない「日本途上国化」なのです。

わが国の高齢者はこれはいつか来た道として理解して、アジアの民衆が同じような豊かさを共有するまでの時流として納得して対応しています。

#### \*スマホ娘はITオンチ親父を蔑視

「グローバリゼーション」(地球規模化)といわれれば、地球レベルには違いありませんが、前

世紀末にはじまった超大国アメリカと途上諸国が中心の経済が「グローバル化」です。ソビエト崩壊後の東西ドイツ統合をはじめとする地域内の混乱の收拾に手間どったEC諸国とは異なりましたが、経済のバブル崩壊と政界の離合集散のなかで世紀を越えました。しかし超大国アメリカ市場への途上国進出は日本経済をきしませながら新世紀へと舞台は回ったのでした。そして「BRICS」（ブラジル・ロシア・インド・中国、南アフリカ）をはじめとする途上諸国の台頭という時流にさらされることとなりました。

その対応に覆われてしまったために、もう一方の国際的潮流である「高齢化」は波がしらさえ見えなくなってしまうのです。見えないけれども新世紀の国際的課題として底流しており、日本の対応は先行国として各国に注目されているのです。

「先進国型の高齢化社会」を迎えるはずが、「途上国型の若年化社会」に出くわしたのですから、日本の高齢者は二重の災難に見舞われることになりました。

ここまで述べてきたように、政府の「高齢社会対策」の遅延が二〇年つづいており、対策を講じないうちに、さまざまな難題を引き受けざるをえなくなっているのです。

ほんとうは若年者・女性とともに、高齢者もまた日本社会で、シルバーのように渋く、プラチナのように不変に輝いていなければならぬ時期を迎えているはずですが、そうになっていないのが実情です。シルバーやプラチナどころか、スマホ娘には、粗大ごみほどの扱いさえ受けているのです。とくにIT産業が発展段階で引き起こしている情報格差は、個人間や世代間ば

かりでなく、地域間や貧富間でも生じており、ここで論じるには問題の根は深い。ここではスマホ娘にどう対応して、家庭内で「デジタル・デバイド」を克服して高齢期人生の「尊厳」を確保するかに論点をしばっておきたい。

## 中年現役にはにぶい賃金上昇

中年現役と引退高年者の間で。

国家の「中堅官僚」は、安定した国を支えているのは国家財政と国家事業をあずかる「国家公務員」のわれわれであると当人が思い、そのつもりでしごとをしていますからわかりやすい。

しかしもう一方で国を支えているのは、国の骨組みをつくって安定した経営をしている企業であり、その企業を支えて事業をこなしながら安定した家計を営んでいる「中堅社員」です。一人ひとりにその自覚があるかどうかはともかく、業界の実態としても総体としても「中核」を意識して企業を支える人たちなのです。

わが国の企業は「同じ釜のメシを食う」という帰属意識の強い伝統を持っています。

いま各企業内の「中堅社員」が、企業と業界の将来をめざして「よしやろう」と考えて行動し、「IT青年」がそれに応じ、「女性」が新たに加わり、そして「社友」が知識と技能とで支える姿でないとオールジャパンの骨組みとして安定して先へすすめないのです。先輩である「社友」の愛社意識が問われているのです。

金融緩和という「前払い政策」で、企業は潤いましたが、「中堅社員」がすっかりとその恩恵を受けたかどうかが問題なのです。会社の留保ばかりで、「中堅社員」へのそういう声を聞きません。それでは「よしやろう」という意欲が湧くわけがない。想定外の金融緩和の後も「中堅社員」の側から「よしやろう」ではなく、「もう我慢できない」という悲鳴に近い声すら挙がっています。そんなことで経済が上向くはずがないではないですか。

ことあるごとに「成果主義」を強いられる。正社員が減り、アルバイトと派遣社員が混在して同じ職場で同じしごとをする。しごと増なのに実質賃金の目減りがつづく。企業の生き残りを託されて、先輩から引き継いだ職責を黙々と担ってきた中堅層の人びとの胸の奥に、将来への不安がつのっていきます。リスク回避型の経営者の自己保身の発言からは展望が見えてきません。手い年は延びたものしごとのない高齢社員の気分も萎える。同僚との間でも同業者との間でも親和の感性が少しずつ磨り減って働かなくなる。新入社員に帰属意識が生まれにくい。

「中堅社員」は安定した気分を保とうとするのでしようが、それとは裏腹にいらだちに近い感情が自分にも社内にも強くなっていく。企業の生き残りのために身を挺することを余儀なくされている「中堅社員」のしごとへの覇気は薄れざるをえません。退職社友には理解できないほどに職場環境は悪化しているのです。社友への企業年金より現役の暮らしを優先せよという声すら挙がることとなります。

異次元の「金融緩和」という前払い政策によって、企業や株主は潤っていることはたしかですが、

新事業を企画して景気回復のために働くのは「中堅社員」なのです。

「よしやろう」ではなく「もう我慢できない」とは何としたことでしょうか。

どこかにしごとをしないで得をしている「事半功倍」の人がいて、しごとをしてもプラスにならない「事倍功半」の自分たちがいる。この不公平感が先に立ちます。若い労働者が不安定なしごとでも最低賃金でも働かねばならないのに、生活保護や年金で安定を得ている者がいる。「ナマ保（生活保護）で家族二〇万だつてさ」なんていう話まで耳にする。

そのうえ四人にひとりの「高齢者」のうち、元気な人は毎日が日曜日でいったい何をしているんだ、という批判まで飛び出す。現役世代がムリして負担している年金を受け取りながら、ウォーキングをし、スポーツジムに通い、旅行をし、レストランで会食し、次の時代に「われ関わり知らず」として暮らしているのではないか。

何より不公平なのは、資産として留保して手つかずという約一四〇〇兆円という「家計黒字」です。バブル以来、戦禍世代が貯蓄もせず働きづめに働いてつくりあげた九割中流の社会で、しごとはほどほどにして貯蓄にいそしんでいた戦後世代が高齢者として年金を得て暮らしている。ため込んだ平均約二二〇〇万円という貯蓄は手つかずのまま「いまや年金暮らしです」という気楽さについてです。

自分の親を見ればそんな資産はないことを知ってはいるので、どこかに平均以上の貯蓄を「塩漬け」にしながらかきこもりの余生を送っている高齢者がいると思うだけで「中堅社員」

の心にわだかまる不満は溶けていかない。時代の推移と連動しながら人も動くし株式や事業出資金にまわってネも動くという欧米と異なって、日本では現金・預金のままで動いていない。

顔見知りの先輩たちに対する功労者としての敬意とない混ぜになって「中堅社員」の胸の内を右往左往していたらだちは、「高齢者資産」についてふたつの意見に集約されることになります。まずは同じ「将来不安」をかかえながらの「資産」の差です。

同じ将来への不安をかかえてはいても、高齢者は「資産」を持ちながら年金で余生をおくつている。一方、企業を支えて働いている「中堅社員」は、貯蓄する余裕もなくしごとの先行き不安のまま日々をすごす。

高齢者側の言い分は、この先どこまで分からない長い老後生活の不安を解消するためには、底まで知れている資産を「塩づけ」といわれても抱えこんでおくしかない。それは一人ひとりも小額でも、増えつづける高齢者とともに増えつづけて、それが総体として経済活動の効率を悪くし、企業活動の手足を縛っているのではないかというのが、「中堅社員」側からの「高齢者資産塩づけ」批判なのです。

#### \*世代間に亀裂が広がる

国の財政をあずかる「現役官僚」の理解は少し違う。冷ややかというか冷静です。

一四〇〇兆円といわれる「家計資産」は、超一〇〇〇兆円の財政赤字を補てんするための安

定した黒字財源としては動かないほうがいい。やたらに動いて減少してしまっただけは困るからです。やがてあと二〇年もすれば一世代一過性のものとして、相続とともに解消され、次の世代に移ることになります。ここはだれも声には出しませんが、それは自分たち世代の高齢期の安定財源ともなっているのです。同世代の企業内の「中堅社員」にもわかってほしいというのが、国を支える側の「官僚」の戦略としての理解なのです。

もとはといえ、この二〇年、「安心して暮らせる高齢社会」づくりのために出資されるべき資金だったのですが、「高齢社会」に対する国のブランドデザインが欠けていたために、将来の不安から貯蓄されることになったのです。

将来が安心できる「高齢社会ブランドデザイン」が掲げられていて、具体的な構想として納得できれば、高齢者になる途上で出資・消費すべきものだったのですが、構想がないゆえに「使うべき時に使うべき所に使えなかった資産」として、老後不安の支えとして個人の家計に積み重なってきたものです。「貯蓄過剰」といわれても、高齢者なら実感として理解がいくところなのです。

高齢者側の言い分は、定年前の企業内では「グローバル化」対応とかいつて若手にしごとを集中させ脇役を余儀なくさせておいて、定年後には老後資金をねらうのか。現役は自分たちの力でやりぬいてくれないと困るではないか、となります。

企業を支えている「中堅社員」の側からは、年金財源の支払者として、「高齢者資産移譲」



の要請が力を増すことになります。使わない高齢者から使い手へ資産をトランスファー（移譲）すべきではないのかというもの。これは新しい財界をつくる勢いの若手オーナーたちが共有する持論でもあります。

いくら景気回復でもがいても、いっこうに進まない要因が、高齢者層の支援の欠如にあるというもの。使わないし使えないのなら、必要としている若手の実業に資金を回すべきだというものです。この要請は想定外の金融緩和があつて、勢いはややおさまっていますが。

先ごろ個人レベルですが、「教育資金贈与」として一五〇〇万円までの非課税措置が決まりました。そのときには「愛情口座」といわれて若い母親たちの関心を呼びました。しかし高齢者がため込んだ貯蓄を孫のために動かそうという官僚の側からの「高齢者資産」ヒツペガシ策であり、上限とはいえ一五〇〇万円とはだれを対象にしての数字かという批判も出ました。孫の学問支援のために、なけなしの福沢諭吉幣を工面している立場からは、一五〇〇万円という高額には実感がないし、だれが決めたのか不愉快である。そんなことでは「高齢者資産」は逆に動かなくなるというものです。

ところで「引きこもり」は、引退高齢者だけのものではなく、企業内でも起こっています。この傾向は正社員にも広がっていて、即戦力を期待されて入社したもの、適性と将来に不安をつのらせた新入社員の「ニート化」が少なからずあるといえます。藤谷さんの息子もその心配がありそうです。

そんな不安定状況に包囲されている「中堅社員」は、気づかないうちに「自己チュー」（自己中心主義）に陥ってしまいます。これ以上すすむと企業の骨格が崩れてしまいかねないほどなのです。

「高齢者になればわかるが、そう簡単に移譲などできるものではない」

と、後輩の苦しい立場に同情しながらも、高齢者になって年金支給にありついたらばかりの「団塊の世代」の人びとからは、後輩の甘えへの不快感を隠さない批判があがることになります。世代間に亀裂が広がる。

これ以上に亀裂が広がらないために、中年世代に安心感を与えるためには、高齢者が資産や知識や技術を活用して、次世代が高齢者になったときにも使えるモノや憩える場所やしくみをつくること。これは「高齢者資産」を減らすのではなく増やすことになるからです。

「自分がその木蔭で憩うことのない木を植える」（W・リップマン）  
という後人を思う姿勢を高齢者みんなで示すこと。

「中堅社員」のみなさんは、先輩の果敢な挑戦を見守るのがいい。得られる経済的な波及効果は将来にわたって大きいし、その成果はいずれ次世代のあなた方の資産となるのだから。

## Ⅳ 高齢者間に見る較差

かつては功いまは罪の「急流勇退」

まだしごとが十分できる現役のうちに惜しまれて引退する。そういう引退のしかたを「急流勇退」というようです。プロ野球の松井秀樹選手にもそういうところがみられましたが、なかなかできないことなのです。先ごろアニメ映画の総帥、スタジオジブリの宮崎駿監督が引退表明をし「急流勇退」しましたが、こちらは「急流復活」。これもできづらいこと。

企業内でもかつては敬愛する先輩のそういう「いさぎよい進退」が、後輩に活動の場を与え、将来への励ましを与えてきました。企業や組織の「高齢者リストラ」が始まってすぐのころには、少々の退職優遇を受けながら、優れた経験と人格をそなえた企業人が定年を持たずに潔く職場を去っていったのでした。後輩としてはだれもがそういう君子然として身を引いて「引きこもり」の人生にはいった先輩の姿を思い浮かべることができるとでしょう。

進退に関して、時代を越えて、

「君子は進み難くして退き易し。小人はこれに反す」(『宋名臣言行録「司馬光」から)  
という評価が知られます。

志の高い人は出世に執着することなく潔く進退しますが、志の小さい人はこれとは反対に役職にこだわって動く。一般人はそうはいかないから、さしたるしごとがなくとも定年まで勤める。ありがたいことに、年金が始まる六五歳まで定年がゴムひもを延ばすように延びてつながってくれたのです。企業の業績によるのではなく福祉対策として国は想定外の金融緩和によって市中の資金を支えたのです。

\*「隠退」で知識・技術を持ち去る

一方で「中堅社員」はといえば、しごとが増えているのに減収を余儀なくされているという実情に置かれています。

そこで、職場を離れたアフター5の街談巷議の場では、引退した先輩もふくめて高齢者の多くは、われわれが働いて負担している年金を受け取りながら、「われ関わり知らず」として「引きこもり」の暮らしをしているのではないか、という不満が、ビールを呑んでは吐き出されまです。定年待ちの高年社員のしごとなしでの高給と退職金にも話題が及んで。

しかしこれも社員個人のせいというよりは時代の経緯のせいなのです。引退後の「余生」があまりにも長すぎるのです。若い人には、人生の終末までの長い長い無為徒食が不公平なのです。先輩を功労者として敬愛はしているものの、それは「余生」がほどほどで高齢者が少なかったころのこと、いまや高給社員は高齢期に見合いのしごとなしのまま過ごして六五歳で退職金を得て消えていきます。

それでは困るというのです。早期退社して退職金と年金で何もしないで長生きするのは美談でもなんでもないのです。会社で培った能力を活かして延びた定年までの間に企業年金分くらいは稼いでから去ってほしいのです。しごとまみれの若手としては、しごとなしで四半世紀を「余生」として過ごす高齢者がうらやましいより忌々しい。そこから敬意なんか湧くわけがな

いというのです。

年長者からは年少者の人生がわかるおですが、年少者から年長者の人生は分からないのかも  
しれません。では二〇歳のころ読んだ『こころ』や『カラマーゾフの兄弟』では何を理解して  
いたのでしょうか。やはりそれは二〇歳での理解であったということになります。

高齢者の人生とっして、ここでは典型的な引退の事例として、六五歳をすぎし終えて晩年期  
にはいった高齢者の三様の暮らしぶりを見てみようと思えます。敬意まではともかく、だれも  
が外見ほどには安泰ではなく、それぞれに高齢期の課題をかかえているのがわかります。

まずは「急流引退」をして会社を去ったあと、「われ関わり知らず」こそ君子の道をわきま  
え「引きこもり」の人生を送っている大島修一さんの暮らしぶりから。

### 「隠退ウーピース」として

大島さんは、名前に似合わず背が低いし、君子然としてあたりを払うような風采ではないで  
すが、聡明さだけは疑えないほど広い額に細い目で、とくに笑った顔が安心感を与える温和な  
風体の人です。

超一流とはいえないですがだれもが知っている並一流の企業を当時の六〇歳定年まであと二  
年を残して早期勇退してのち、「家庭人」（と大島さんという）に徹して一〇年余を静かに暮ら  
してきました。思えば一〇年は早かったといえます。

「古希」を迎えて急に体力の衰えを実感してからは、これからは「老齡期」と率直に認めることにしたそうです。A新聞社の調べでは七〇歳からを「お年寄り」と思う人が半数以上というのですが、自分でもそう思う。

男性の平均寿命である八〇歳までは一〇年あるが、自分は平均より丈夫だからあと一〇年とは思っていない。一〇年ではやや短い。そこで七〇歳の余命を加えた八五歳までを健康寿命として、そこまではあれこれ楽しんで過ごせればという。からだのどこかにもとに戻らない症状（フレイルといいます）が残って健康寿命が終わる。そこから約五年が介護（多分家内に）を受けながらの余生」となる。

こういう人生計算を大島さんは立てています。

会社人間でしたから地域に知り人はいませんが、学友や同僚があちこちにいるし、それにつかず離れずに暮らす妻と近居している娘の家族がいます。そして額に汗して旬の食材を得る「自営菜園」が日課になっています。住宅ローンがなく小菜園ができる土地を残してくれた岳父に感謝しているといいます。典型的な「君子的引きこもり」の人といえます。

肝心の生活費はどうでしょうか。

細目までは知れませんが、公的・私的（企業）年金のほかに資産収入もあって、近居している娘や孫の支援、病気や不慮のできごと、車の買い換えや築二〇年を越えた住宅・設備の修繕（これが思いのほか費用がかかる）、そしてふたりのささやかな葬儀費用まで含めて、「生涯準

備金」(預金と国債・株式が半々)はいままでのところ崩していない。それでも小遣いは月八万円以上。この以上というところに余裕が感じられます。ありえたかもしれない他の暮らしと比較して、いまの「家庭人」としての暮らしに不服も不安もないといいます。

ありがたいことにデフレで目減りをしつづけていた資産が、金融緩和の株高で、老後の安定した暮らしを支える安全圏という四〇〇〇万円(高齢者の一六%という)に補充をえました。

正直にいえば、健康に不安はないのですが、二〇一四年六月に一一六歳で亡くなった世界一の長寿男性であった木村次郎右衛門さんが、郵便局員をつとめて退職した後は九〇歳まで農業をして長寿だったことから、「できる間は農作業を」と考えています。

同年齢の妻の余命は一九・五なので八九歳。お互いに健康に留意しているから、自分は八五歳からの余命五・九を加えて九一歳だが、妻は五・八を加えて九五歳まで行ければと思っている。

「自分はムリかもしれないが、同い年の妻の方はクリアできると予測しています。」

いっしょにエンディングという希望は持っていない。申し訳ないが、ほどほどの期間は妻の介護に期待しているというのです。

#### \*「一陽来福」型の高齢者層

岳父と同様に住居と敷地のほかは資産を残すつもりはないと子どもたちにとってあるので、

囲碁、釣り、ゴルフなどの趣味を楽しみ、旅行でも観劇でも食事会でも、学友や同僚から声がかかって可能なかぎりは積極的に参加し、浪費もする。

同窓会の名簿を見ると、死去がちらほら、半数近くに有訴の記載がある。だれその認知症や医療・介護の話を目にすると、ドック検査による健康状態の良好な自分が、めぐまれたひとりに思える、と大島さんは自慢のひたいをさすります。

日本経済に関しては、下降へむかう時期にあると感じていますが、大島さんは「われ関わり知らず」と固く決めているので、職場のことで後輩が知恵を借りにやってくるのにも、

「いまさら会社のために、わたしまで引き出すのはやめてくれよ」と、冗談としてではなくいつて態度を崩さない。

後輩からしごとに関する声がかからなくなり、七〇歳を過ぎて、みずからも体力の衰えを実感する日はさみしい。とくに知人の思わぬ死報に接すると、テレビも見ず、新聞も読まず、終日、気分の晴れないこともあるといいます。惜しい知名人の訃報にもよく出会いますし。八〇歳で亡くなった同名の大島渚監督の死はことのほか骨身にこたえたといいます。

独居を愉しむ「君子的引きこもり」の境地にはなお遠いことは自覚していますが、大島さんは自分では幸せな「隠退ウーピーズ」（豊かな高齢者層）だと思っているそうです。

「ウーピーズ」などと勝手に自得したところで、父祖伝来の土地の一部を切り売りして、億単位の資産を得て安全圏にいる都市近郊の「金満農家」とは違って、たかが「一園農家」にすぎ



ませんから、日本経済の急降下が起こって頼みの資産が吹き飛んでしまうことのないことを願って暮らしているといえます。

大島さんは明日もまたいい日であるようにと日また一日をていねいに迎えて過ごす「一陽来復」型の高齢者。だから御用学者と財務官僚がさまざまな手法で高齢者の資産を切り崩す政策を取り始めたのが気がかりです。官僚のそんなやり口には、

「後人としてあるまじき行為ですよ！」

と不満顔が似合わない大島さんも不満を隠しません。といっても「引きこもり」に徹した生き方を変えるつもりはありませんから、思いのほか早々とやってきた「高齢期じり貧人生」とつきあう覚悟だけは固めています。それでもひそかに自分はなんとか安全圏にしていると確認しているようです。

せめて大島さんくらいは生涯を安穩に過ごしてほしいのですが、このままの状況で推移するとすれば、いまは自分は安全圏と考えている人びとが生涯を安穩に過ごしかれるかどうか。ましてや「現役六五年」をすごし終えて、平均的人生をよしとして過ごしてきた高齢者の七〇％までが、このままで将来も平安平凡に過ごしかれると感じているようですが、このままではそうとは言い切れない事態が想定されるのです。

「ほどほどの赤字人生」が男の美学

相川進さんは、このままだとかなりきびしい高齢期を送らざるをえないことになるでしょう。父親の後を継いで中小企業の経営者になった「生涯現役の跡継ぎ二世」です。二〇年ほど前、平成になってすぐに四〇歳代なかばで二代目経営者となりました。ですから「六五歳定年」という区切りはないのですが、会社のほうには「七〇年破産」という結末があります。

父親が元気だった高度成長・繁栄期といわれた時期も、やたら忙しかつただけ。とりわけ家が豊かになったわけではなかったといえます。周囲の人びとが世間並みに暮らせるようにと、父親がひたすら心を砕いているのをみてきました。家族の贅沢にもきびしかったから、社員の子をうらやましく思ったこともしばしばあったそうです。

父親は経営者として教育（学歴）がなかったことを生涯の負い目と感じていたから、「おまえは大学を出にやいかん」

と口癖にあって、家業の手伝いを強いず、子どもが高等教育を受けて意気揚々とした人生を送ることに期待しつづけたといえます。晩年には「親孝行進学」で大学を出た息子が期待していたほどの人生を歩んでいないことを知ることとなったのでした。

「MADE IN JAPAN」の質の良い日本製品を底辺でささえる会社に誇りをもっていた実直な父親と労苦をともにする社員に囲まれて育ち、いま二代目として跡目を継いでいる相川さん。

見回せば、わが国の戦後の復興期からいわゆる高度成長期（一九五〇〜七三年）のころに設立され活動した中小企業には、相川さんのような跡継ぎ二世は決して少なくないはず。

同じような経緯をもつ機械製造の大企業の子会社（親会社ではないが海外進出をして元気）から下請け品を求められれば、資金繰りをしては設備投資を重ねて製品を納めてきた孫会社である相川工業所は、見方によっては重ねてきた設備投資の借入金を返済するために働いてきたともいえます。もちろん借入金も父から引き継いでいる負の資産です。

父から引き継いで間もなく迎えた世紀末の「列島総不況」。相川さんのような小さな事業所も軒並みに襲った総不況の行く末を心配しながら、父親は世紀を越えることなく世を去った。

その後、一〇年余り。人を減らしながら景気回復を待ちつづけてきましたが、下請け（孫請け）に徹して生涯現役で亡くなった父親には申し訳ないが、ここ五年ほどの経緯からみて、もはや自力での再生の手立てはないところに来たといえます。かつてはそれほどの重さには思えなかった一〇〇〇万円単位の借入金を返済する余力が出ないのだそうです。負担が年々重くなるばかり。朝の寝ざめがつらいといえます。

#### \*「先憂後楽」型の高齢者層

「生涯現役の跡継ぎ二世」の相川さんが引き継いだ父親のもうひとつの遺産である草野球リーグ名門チーム「I」も、若者が減って紅白戦が成り立たなくなりました。

「男というものは、きちんと仕事をすれば、どこで何をしていても、ほどほどの赤字暮らしをするもんだ」

というのが、父親がよく口にし、自分も受け継いだ相川さんの負け惜しみ半分の人生哲学です。周辺の人より先に豊かになるというのが父親の「先憂後楽」の考え方で、親父は先憂ばかり多くて後楽の少ない人生を、日また一日迎えては送って、働きづめで亡くなりました。

製造ノウハウを持つ親会社は、みずから生き残るために、まずは主要なパーツ以外は中国や東南アジアの途上国に生産拠点をシフトしました。その後、製品化まで海外となつて、子会社はともかく孫請け企業は回復どころではなくなりました。「ほどほどの赤字人生」といつていられないほど、朝起きるたびに借金の重みが増し、倒産の日が刻一刻と近づいてくるのを感じているといいます。

独自のしごとにメドがたたず、下がりつづけた担保資産との見合いの末に、遠からず不良債権の処理対象として銀行から見放されるでしょうが、こちらの意欲が萎えるまでは、会社と社員と家族を守るつもり。金融緩和で潤った銀行は、いまは二の足を踏んでいます。日本での焦げ付き融資を清算して海外にむけたいという意図は見え隠れしています。それほど長い猶予期間があるとも思えない。分かっているのですが、独自の道が開けないのです。

さしたるぜいたくもせず、父と同じ「先憂後楽」の心意気を貫いて、輝く「二世の星」(父の口ぐせ)たちを見上げながら、自分だけは沈没船の船長よろしくどこへでもゆくつもり。戦後に父の時代にゼロから始まって自分の時代にゼロに終わる七〇年余の会社人生を、相川さんは納得しているようです。それはそれで昭和時代の一隅を輝いて生きた「二代企業」の終始の

つけ方としてです。

惜しいかな、相川さん。あなたは「先憂後楽」に徹してきたゆえに、「高齢社会」を多彩にし、豊かにする「高齢化用品」のユーザーでありメーカーであるという点でもまた後楽の人のようです。つまり高齢者である自分を豊かにする自社製品への発想がゼロなのではないですか。

「相川さんの会社が蓄積した技術力は、この国の高齢者が必要とする新製品には活かせないのですか」

「孫請けだったわが社ではむずかしいですね」

返答は明快です。感性の高い高齢者の暮らしを豊かにする日用品のために技術を活かして、自力製品で活路を開くことができないものか。そういう中小企業の成功事例をあちこちで聞くのですが。

相川さんが父親以来の下請けの現場で、良質な製品の製造に努めて獲得した製品化の完璧主義を崩すことなく、なんとかして仲間と知恵を出し合って、中小企業の道を切り開いてほしいのです。平成の三代目に「先憂後楽」の心意気を引き継げるような。

中小企業の熟練技術を駆使した「高齢化優良国産品」MADE IN JAPAN の再登場の時期がそこまできていくように推察されるのです。

同時多発の湧き上がるような高齢者用品の要請が交錯して、高齢の熟練技術者の技術と経験が「高齢化新製品」の製造に活かされる。高齢者層の生活感性が満たされる製品の交錯。同時

多発の湧き上がるような内需で新たな経済活力が生まれることになります。

相川さんの寝ざめが軽く明るいものになるような。

### 「貯蓄ゼロの日」へのカウントダウン

給与所得者は二〇一三年四月からの「改正高年齢者雇用安定法」の施行によって、定年が六五歳まで延びました。企業側は営業利益でないこの出費増を金融緩和により生じた内部留保によってこの急場はしのいでいるようです。国からの要請があっても昨今、経営トップはリスクの想定される新規起業には積極的には動かない。リスクを負わないこと、内部留保を確実にすることがいまの経営トップの心得であるためです。だから退職を前にした高齢社員は、新たな事業を考えたり実行する場を与えられることなく、業務替えになったり収入減を余儀なくされながら、「定年待ちの日々」を送ることになります。

多くのサラリーマンは、なんとか定年まで勤めて、行く末が不安な程度の退職金と年金を合わせ計算しながら、家族とどう暮らすかに思い悩むことになるわけです。

横田博さんはそのうちのひとり。技術畠ひとすじに四〇年を会社勤めですごして、改正安定法にはかからずに定年退職しました。途中で転職など考えたこともなかったし、退職後も前職を活かしてできる仕事があればと願ってききましたが、この高齢者リストラ時代。「ハローワーク」（公共職業安定所）にいった登録はしてきましたが、該当するしごとは見つかりません。再就

職をあきらめた失業率には計算されない潜在的求職者を思えば、失業率5%以下など信じられない数字に思えます。

横田さんは、少ない退職金から住民税（これが大きい）を支払って急に重量感を失った貯蓄から、さっそく定期的収入が減った分への「貯蓄取り崩し」がはじまりました。これまでほとんど病氣らしい病氣はせずに健康で過ごしましたから、給料天引きの健康保険料の負担は感じないできましたが、年金からの健康保険料の支払いは大きい。諸税が月々追いかけてくる。

先行きの不安はすでに身辺に渦を巻いているようです。

横田さんは多数派である「戦々兢兢々」型の高齢者のひとり。

「退職したあと、いや、その前から選択的支出の削減に努めています」

と横田さんはいいます。旅行や観劇、書籍・雑誌の購入、外食などを減らしてそれでも生活用品の値上げや日常経費、医療費（薬代）や税負担など「基礎的支出」が確実に増えることから、将来の家計の先行きはとめどなくきびしい。だから技術は活かせなくとも赤字を埋める程度のごとをしたい。五万円から八万円がいい。

「私企業でしたし、さして優れたことはしてこなかったかもしれないけれど、必死で働いてきたつもり自分までが、高齢者になって見捨てられることはないでしょう」

と横田さんは国の将来の施策を楽観的に理解しています。

\*「戦々兢兢」型の高齢者層

長生きをすればいつかまたわが家に「スイトン時代」がやってくるかもしれないが、それでも平和なら生きられるだろうと横田さんはいまは樂觀的に思っています。

不安のはじめは財政負担を軽減するための「公的年金」のカット。実施された「消費税増税」。長年つれそってきた妻の持病とそれにちなむボランティア活動への出費。いつわが身に降りかかるかもしれない「医療費」の自己負担。わずかとはいえ企業業績の不振による「企業年金」の減額。あと三年つづく住宅ローン。そしていつまでも独立できない子どもたちへの支援出費。実は「ペイオフ」（預金の限度内払い戻し。一〇〇〇万円）に届かないほどの預金額だから、長生きなどしなくとも途中で必ず訪れるにちがいない「貯蓄ゼロの日」への不安。

「貯蓄ゼロの日」へのカウントダウンは、すでに始まっています。「薄氷を履む」ような日々がこれから長く続くことになるのです。

通信機器の優れた技術者であり、つい最近まで会社の主力製品のひとつになっていた機器の共同発案者。といって横田さんは、社員が企業内で発明対価（成果主義）を求めるのは違うと思うてきました。青色発光ダイオード（LED）で企業から三億円を得て、ノーベル物理学賞まで得た中村修二さんは天才で特別な人だから許される。自分がかつて会社から受け取った企画賞が三万円であったことに不服はないといいます。それも得た次の日にはみんなの歓送迎会用の部会費になったことも当然と思っています。



「将来への希望はしごと現場の活力にある」

と技術者であった経験から横田さんは確信しています。

自分は細身だったのでヘルメットは似合わなかったですが、NHKの人気シリーズだった「プロジェクトX・挑戦者たち」で、仲間と工夫を重ねて事業に貢献した人びと、いかにもヘルメット姿が似合う人びとの姿をみ、話を聞くのが楽しみでした。だらもが成果を自分のものとせず、みんなの協力の結果だという技術者たちがこの国の骨格を支えているという信念に今も変わりはありません。

番組が終了してずいぶん経つというのに、横田さんの胸の奥に刻まれたように、気がつくといまも、中島みゆきが歌ったテーマ曲の一節、

「♪つばめよ、地上の星はいま何処にあるのだろう」

が繰り返した体の中を流れています。仲間との苦闘のあとを思いながら、溢れる涙をじっとこらえていた技術者たちの顔・顔・顔はいまも忘れられません。